2024年2月24日オープントミーティング報告

●2024.2.24(土) 15:00-16:30
●発表者：林部千佳子　小学校教員
●テーマ：p4cにおける思考のあり方とその指導について
●zoom
●参加者　一般参加当初　14名　　運営委員3名　合計　17名

●内容：大学院で「話し合いの指導に関する研究」をしています。その中で、p4c においてどのような思考を生じさせることができるか、そもそも対話における思考とはどのようなものかを考えています。これまでの研究成果や指導実践を聴いて頂きご意見を頂ければ幸いです。

発表要旨

1　修士論文の研究テーマ　「「授業における話し合いの指導に関する研究」
　「話し合い」には様々な形態がある。討議、会議、議論、ディベート、対話など
　p4cによる対話も「話し合い」の一形態

2　研究テーマへの動機
　「話し合いは難しい」、「話し合いと言っても、教師の指導で子どもは発言をしているだけではないか」、「そもそも話し合いは必要か」

3　授業における話し合いのタイプ
　① 知識の習得。Ex. 国語の読み取り、実験結果から科学的法則の習得。
　② 問題解決。Ex. 学級会
　③ 上記以外。・思考するため、・理解するため、・合意形成を目指す準備。Ex. 道徳、p4c
　　参考　「戦争・暴力の反対語は、平和ではなく対話です」(暉峻淑子、『対話する社会へ』)

4　研究テーマの焦点。「話し合い」における「思考」に視点を置いた指導
　→　①　そもそも「思考」とはどういうものか？
　　②　その「思考」ための指導とは？　→　p4cの実践

5　実践報告。小学校4年生。テーマ「勇気とは何か」
　授業案のポイント
　・1つのテーマを2時間で行う。
　　→　1時間目に話し合いをするための知識・情報を想起させるため。
　・2時間を2日に分ける。

→　・話し合いは疲れるため（子どもも教師も）
　　・1 時間目の話し合いから、2 時間目の指　導法を考えることができるから。
・ 発言するよう促す。
授業研究として
・話し合いの中で、教師はどのような発言をすれば、子どもたちの「思考」を指導できるか。

6　授業の記録の紹介
7　授業の発言の流れの分析
8　対話を深めるための 7 つの質問　WRAITEC の紹介
実際の授業の中で、教師が WRAITEC を使っている場面の紹介。
9　実践の考察
10　これから必要と考えること
思考力を身に付けるということは、WRAITEC のような技能を自ら使えること、また思考における公平性、慎重さなどの態度面を自分でモニターするなど、自覚して思考できるようになる必要があるのではないか。

Q&A

Q：教師の発言によって子どもの思考を指導するということの意味はどういうことですか。また、勇気をテーマにしているので、そもそも勇気とは何かという問いがあってもいいのではないですか。勇気をテーマにした場合、事前の準備としてどのようなことをされたのですか。
A：『こわくないやい』を教材として使うにあたって、かえるとがまくんの物語を読んで、対話のテーマとしては、「おちば」とこの「こわくないやい」の二つがふさわしいと思いました。こう思ったのはこれまでの経験からの勘のようなものであったが、現在のクラスの子どもたちにとっては、後者の方が合っているのではないかと思いました。ということで、この作品に決めるまでにはそれなりの時間を取りました。その後、この物語に即した形で授業計画を立てました。その上で、勇気に関する授業の流れを自分なりに組み立てました。指導については、強い意味で捉えられるかもしれないが、そうではなくて、学校が行うことは全てが、ある意味、指導だと思っています。ということで、特に教師の側からの介入という意味では考えていなません。P4C を授業で用いること自体が指導であると考えています。
Q：教師の指導によって、子どもたちの思考が深まるということですか。
A：今回の実践では、教師がファシリテーターとしてどのような言葉をかけたらいいのか、ということに興味がありました。例えば、サンデル教授の授業では議論が活発で、深まっ

ていくが、それはある意味、教授の「指導」があってのことだと思います。教室での話し合いの中で、教師はどのようなことを言えばいいのか、あるいは言葉かけはどうあるべきか、また、実際にそれらは時間とともに変化していくものだと思います。このようなことを踏まえて、どんな言葉を自分は言うべきだったのかということについて、反省も含めて、今回は紹介させてもらいました。
Q：P4C をされて、どんな思考が大切だと考えておられるますか。
A：P4C での会話が、他の教科の会話とは違うタイプだと感じています。意味を問う、前提を問う、矛盾はないか、公平に情報を吟味しているか、というようなことを学ぶための話し合いというのは大事ですが、実際に実施して見ないと分からないという感じがします。
Q：思考には、技能メント態度面とがあるということですが、今回の実践で、子どもたちの態度面と技能面の成長というのをどのように見取られていますか。自分の場合は、授業の後にワークシートなどを利用して、子どもたちの振り返りから今言われたような面を見つけようとするだろうなと思いますが。
A：今回は、学生として授業をさせていただいているので、なかなか振り返りが出来ていません。強いて言えば、話し合いに参加している子どもたちの様子や発言からしています。技能面にしても態度面にしても、両方とも指導がいると思っています。それでも、最初は態度面での指導が多いと思います。これが定着してくると技能的な思考を取り入れていけるのではないかと感じています。
Q：アンパンマンの話をしていた子に対して、「もういいじゃん」と言って、話しを進めようとする発言をした子がいましたが、その時の雰囲気を教えてもらえますか。
A：子どもたちの関係はまったく悪い雰囲気ではなくて、そのように発言した子は、話し合いの状況を反省できる力を持っている子で、その話し合いの状況を察して、発言しています。議論を進めることが出来ているので、その場にいた教師としては、すごいなと感じました。
Q：授業の文字起こしを見てみると、教師と子どもとのやり取りはあるが、子どもどうしのやりとりがなかったように関したのですが、どうでしょうか。
A：子ども間のやりとりができるところまではいけていないのが実情です。まだ 3 回目という事情もあります。また、担任ではないので、関りが浅かったということもあると思います。
Q：その上でのことですが、子どもたちが自分たちでお互いに議論していくにはどうしたらいいと思いますか。
C１：担任をしていないと、子どもたちが対話をする姿勢が整っていなので、難しいと思います。実際に P4C をかなりやっておられる先生の授業に参観させていただいた上での、研究をされたらどうでしょう。
C２：RAITEC のようなものを、少しずつ子どもたちが身につけていけるようにする。問いを出していけるような環境を整えるのが大事かなと思います。

Q：トーキング・ツールのようなものを使って、子どもに聞く態度を養うということについて教えてください。
A：コミュティボールは使いましたが、やはりなかなか難しかったです。しかし、役に立ったとは思います。その上で、聴く態度を取るようにと呼びかけていました。
Q：今回は 3 回という少ない機会ではあったけれど、実際の授業をされるにあたって、長期的な視野はあったのか、それとも今回の授業で子どもたちに身につけて欲しいものがあったのかどうかという点と、勇気というテーマに関して言えば、子どもが発言すること自体、勇気のいることだと思いますが、実際の授業のあり方と勇気とを結びつけるような場面はありまたか。
A：実際 3 回しかなかったけれども、一応 RAITEC をカードにして黒板に貼って、授業の中でこのようなことを考えながら、このようなものを使えたらいいよねー、ということを言ったけれど、それを理解したり、使ったりできるところまではいきませんでした。
Q：今回は P4C の実践の報告をしていただいたのですが、P4C に出会うまでの思いのようなものを聞かせていただけませんか。自分が大切にしているようなことを教えていただけませんか。
A：最初に紹介させていただいた動機が元です。やはり、P4C を知るようになって、自分も含めて、話し合いということが本当に実践できていなかったなということがあります。また、自分自身が様々なバイアスの下で物事を考え、判断してきたということを自覚させられたということです。話し合いや対話は平和のために大切だという思いがあります。

文責　桝形公也

以下の桝形の資料も参考にしてください。。
https://kansai.p4c-japan.com/wp-content/uploads/2020/10/2017-masugata_p4c_no_jugyo.pdf
（P4C in schools KANSAI-JAPAN のホームページ https://kansai.p4c-japan.com/→「参考資料」→「P4C の手引き」→「子どものための哲学の授業のために―探求の共同体の形成」）